

波多野 綾子 (Hatano Ayako) オックスフォード大学 法学部 博士課程

ON2022『私が見た・感じた「ジェンダー・ギャップ」について』

まず、多様なバックグラウンドを持つ奨学生の皆様、蜂谷さんと事務局の皆様と、それぞれに感じたことのある、もしくは見たことのある「ジェンダーギャップ」について意見を交わす場を作っていましたことを、心より感謝申し上げます。特に蜂谷様、中田様におかれましては、ご家族を見送られ、公私ともにお忙しい中、充実した議論をサポートしていただき、感謝に耐えません。

日本における「女性活躍」の議論においては、どうしても特に経済関係における女性の数の議論にはじまり、そこで終始してしまいがちになることもあります。しかし、藤田さんもコメントで述べられていましたが、その背後にある一人ひとりの多様な人生、いきがい、働きがい、など数字に出ない部分への着目と議論なしには、一人ひとりの多様性に着目した構造的な不平等の改善につながることはないのではないかと考えています。そのため、今回のテーマに「私が見た・感じた」という言葉があったことは非常に重要で素晴らしいと思いました。それぞれの経験のレンズを通じた発表を拝聴しながら、時代や場所が異なれば、ジェンダーギャップも見え方が異なるのだということを強く感じることができました。

まず、蜂谷理事の発表では、男女雇用均等法から女性活躍推進にいたるまで、女性の経営者として(おそらく「女性経営者」という言葉も、男性であれば「男性経営者」といわれることがあまりないことから、女性の経営者であることの社会的な一定の認識を反映した言い方となるのでしょうか)見てきた歴史、その中の困難、そして変化の希望も感じることができました。他方、特にいま現在、日本の政治においても子育てにおいても、日本と

フィンランドの置かれた位置の差が改めて実感され、今こそ日本は諸外国の好事例を積極的に受け入れてきた実績を活かすことができるはずなのに、なぜジェンダーではそれが進まない(もしくは少しづつの変化も進んでいるが遅すぎる)のかと暗澹とした気持ちになりました。社会的な構造や規範が変わっていくためには、ジェンダーを女性だけの問題ととらえず、男性も、またそれ以外のジェンダーもエンゲージしていくことが大切ではあると感じていますが、「すべての女性が輝く社会づくり本部」の写真はあまりに極端で、思わず画面の向こうで天を仰いでしまいました。

シャフゾドさん、ジャムフルさんのプレゼンテーションからは中央アジアにおけるジェンダーギャップの存在を学ぶことができ、大変勉強になりました。他方、「ジェンダーのことはこのような機会がなければなかなか考えない」といったシャフゾドさんのご発言にも見えるように、男性として生きているときには、日常の中で(おそらく一部の女性はより強く感じている)ジェンダーギャップを意識していないところもあることがわかりました。また、外から見ると日本はジェンダー平等がすすんでいるように思われていたというところもびっくりしました。この点は、留学の意義でもありますが、やはりその国で、地域で、コミュニティで、実際に暮らしてみるとわからないことが非常に多くあるということを実感しました。

上記の点にも関連しますが、何をもって「過激」とするのか、は人の感じ方によって変わります。フェミニズムとは「決して男性嫌悪や女性だけのための運動ではなく、全ての人が性差別を受けることなく、自分らしく生きる社会を目指す運動」という崔さんのプレゼンテーションには心から同意しますが、同時に、「過激」「行き過ぎた」という判断も、どこから見るかについて変わってきます。ト

ン・ポリーシングの過剰に陥らないためには、まず、相手の主張がどのような現状認識に基づいているのか、そしてそれは自分の見ているところと同じなのか異なるのか、データと個人的な経験・感情といった客観的なところから主観的なところまで考えながらコミュニケーションをはかる必要があるのではないかと感じています。事実認識をすり合わせた上で、共通の基盤がどこにあるのかを探り、議論をしていく必要があるのではないかでしょうか。そのためにも、そして個人の問題を社会全体の問題の中でとらえなおしていくためにも、マクロのデータをきちんと読み解くことは非常に重要であると考えます。そこで今回自身の個人的体験の出発から、マクロなデータを紹介し、それをもう一度各自の経験に引きつけてみるということで議論を行えればとおもっていました(時間がなく、議論がおこなえなかつたのは少し残念ですが、また別の機会があればとても嬉しいです)。

また、ジェンダーを考えるとき、高橋さんのコメントにありました、ジェンダーのみならず、一般に生物学的に明確と思われているセックス(性)の違いも実は自明ではないのではないか、という指摘は非常にうなづけるものでした。曾我さんのLGBTQに関する疑問や岸上さんの「ジェンダーの問題を考えるには、歴史的かつ国際的な文脈を踏まえる必要がある」という点も、ジェンダー／セックスの自明性やステレオタイプを疑うという意味で通じるところがあるのではないかと思います。このようなジェンダー／セックスといった概念も、学術研究を基盤に作られていきます。戦前ナチスの優生学が、人種において誤った概念を作り出したように、研究者の偏ったジェンダー比率も、偏った知を生み出すことにつながり、差別の再生産に繋がりうるものです。テクノロジーにおいてジェンダー差別が生み出す弊害も指摘される今、研究者におけるジェンダー平等はますます重要なになってきていると思われます。

このような状況を踏まえ、具体的な方向性を考える際に、国境を超えた学び合いは非常に大切

であると考えます。冒頭にあげた蜂谷理事のあげられたフィンランドの事例のみならず、グエンさんのような日越の比較や、茶山さんがご紹介くださったような様々な国・地域の事情を知り、比較し、学びを得ることは、日本において、また世界において、どのように不公正なジェンダーギャップを解消していくことができるのかを考える上で非常に示唆の大きいものであると感じました。ON2022のような機会で奨学生の皆様から学びながら、よりよい未来を模索していきたいと思っています。

以上